石鎚山

海量法師

遠遊千里天涯を度る
南予の山川行路斜めなり
独り石鎚の山色を起す有り
暮春三月雪花の如し

【作者】海量法師（一七三三～一八一七年）江戸時代中期の僧・歌人。今の滋賀県の生まれ。
近江の国のお寺に生まれて住職となり、そのご江戸に出て歌人となった。後に近江に戻り彦根藩主の命を受けて諸国を視察し、藩校を興した。文化十四年八十五歳で没す。

【語釈】＊遠遊…遠いところまで旅すること。　＊天涯…たいへんに遠いこと、の意を強調する言葉。
＊南予…南伊予、の意。現在の愛媛県南西部。　＊行路…旅路、の意。　＊山色…山の景色、の意。
＊暮春三月…新暦の四月下旬から五月中旬辺りの季節。

【通釈】千里の遠いところまで旅をし、天涯の地に来た。ここ南予の山は切り立ち、川は巡りめぐって、道は斜めに続いている。
そんな中にあって石鎚山だけがすばらしい景色をあらわしている。早や晩春の三月だというのに、山上には花の舞い散るかのごとく雪が舞い降っているのだ。